大分県芸術文化振興会議会報

芸振

No.28 50. 9

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・米　田　貞　一　編集人・衛　藤　　久

新しい県民文化の創造

県芸振会議会長　米　田　貞　一

〝よくみればなづな花さく垣ねかな〟

私はこのごろよくこの句を思い出します。なづなは道ばたや田畑のどこにでもある雑草で、春になると小さな白い花をつけます。見なれた家の垣ねに、いままで全く気付かなかった白い小さな花が咲いている。よく見ると、なづなの花です。春を迎えた自然のよろこび、大地からおどり出た若い生命のいぶきが、何の見どころもない一本の雑草にみちあふれています。芭蕉の自然に対するおどろきとよろこびがすなおに表現されていますが、この句にかぎらず、すべて文学・芸術の創作には、まず自然や人生を自分の目でよく見ることが大切なのではないでしょうか。

私たちのしている地方の芸術文化活動でも、自分の町や自分の県を美しく豊かにするには、そこに住み、そこで働くすべての人々の才能を何よりも大切にしなければならないと思います。文化や芸術は東京にだけあるものではありません。地方の芸術文化がたとえ雑草であろうと、中央の企業化された体制芸術にないたくましさがあります。自然と人間に根ざした将来の国民文化は、きっと青くさい地方の民衆の中から生まれ、育っていくにちがいありません。

私たちのふるさとには、遠い過去から現在、未来につながる自然や風土が生きており、そこに住む人間の生活と心と自然が一つにとけあっています。柏木兵三が祖父をモデルに書いた小説「徳山道助の帰郷」で、大分のふるさとは名もない村、ありふれた風景だが、人の心と自然の結びつきが美しく、「故郷はなつかしい自然である」と道助に言わせる。心と物、自然と人間の調和した世界をふるさとというのでしょう。

川端康成は戦後の名作「千羽鶴」の続編を大分県を舞台に書いています。若い女主人公が別府から竹田へ、なき父のふるさとをたずねてさすらう途中、飯田高原の美しい自然につつまれて精神的に回生することになっておりますが、日本の自然を愛し、日本人の心を描いてノーベル文学者となった作者が、この名作を大分の自然の中で完成しようとしたことはおもしろいと思います。飯田高原は大分県で最も自然の美しい所ですが、それをよく見て文学のふるさととしたのは、川端康成の目です。

大分県にはほかにも自然風土の美しい所がたくさんあります。これを素材にした文芸作品には写生・抒情・虚構といろいろありますが、いずれにしましても郷土大分の人と自然をよく見なおし、各人が新しいものを創造することです。伝統に新しい時代の光と生命を与えることです。戦後大分県の芸術文化活動はすでに30年になり、県芸術祭がはじまってからでも10年になります。文芸だけでなく、芸術の各ジャンルでたえず若い血を入れ、民衆の声をこだまし、のぶとく、たくましく、明日の地方文化、地方芸術をつくり上げたいものです。

九重山（武藤完一版画集―1949―から）

武藤完一・県美協名誉会員、版画家

九重山群は九州本土の最高峰を持ち、九州の屋根であると同時に大分県の誇りである。1,700米級11座、1,000米以上になると35座を数える。山群の北部にある飯田高原、南の久住高原とあわせて、日本離れをしたすばらしい草原景観を見せる。九重と久住はどちらもクジュウと読むため、古くから山名論争があり、問題となった。このため現在では山群の総称を九重とし、かつての最高峰を久住とすることに決まった。

大分の文芸

昭和20年・30年代の

「現象短歌」から県歌人協、歌人クラブへ

鶴　見　英　之
（本名・辻　　英　武）
県芸術会議副会長・県歌人クラブ副会長

昭和20年8月15日、第2次大戦は幕を閉じた。やっとの思いで満洲から引揚げ、郷土大分市に辿りついたのは21年8月1日。この時、私の頭に浮かんでいたのは〝Man is immortal〟そして〝芸術は永く人生は短し〟という言葉であった。

荒廃した郷土、焼野原となった大分の町に立って何かしなければならないと考えたが、私にとって学生時代以来病みつきとなっていた短歌の道をおこすことが第一番に頭に浮かんだ。そして昭和の初め「大分歌人」を創設して県歌壇の統一興隆に尽された浅利良道さんのことが思い出された。私はさっそく浅利さんを別府石垣原のお宅に訪ね、このことを話した。暑い初秋の日をさえぎるように東の椽側には南瓜棚が作られ大きな南瓜がいくつもぶらさがっていた。お茶うけに出されたムカゴを私は珍しいものに思った。このあと浅利さんは歌誌の創刊を画策されたが、翌22年3月21日、別府市港町の紙屋旅館で、〝現象短歌会〟の創立歌会を開いたことについては昭和38年7月に発行した「大分県短歌作品集」に大分県歌壇史稿として数ページを費して書いておいた。

一方、大阪から帰住した葉山耕三郎さんは郷里東国東郡伊美町に落ち着くと、21年10月には浅利良道、瓜生鉄雄、大悟法利雄、原常雄、藤原哲夫らに呼びかけ、大分県歌人協会の結成を画策した。この歌人協会の結成大会は22年6月1日別府市児玉旅館（当時北浜にあった）で開かれたが、私が中心部の大分市に住んでいて何かと便利だった関係もあって、準備会など私の家で開かれ何かとお世話しなければならなかった。当時百名以上の大会を開くとなると児玉旅館の4階の大広間しかなかったのだが、集まった会員は120人。会場いっぱいにあふれ、葉山さんが協会結成の経過報告を行い、大悟法利雄さんが「現歌壇の動向」という演題で講演したのを記憶している。昭和28年には大分県短歌大会が発足して県歌人協会の活動は全く停退したが、これを何とかしようと葉山さんの主唱で再建されたのが、36年に結成された「大分県歌人クラブ」である。私は常任委員会では欠席裁判のまま事務局長に推されたが、推された以上はお世話しなければと考えた。県歌人クラブは前掲の「大分県短歌作品集」のほか、「歌人名鑑」「短歌名鑑」など42年ごろまでには5～6冊の刊行物を発刊したが、芸術祭が行われるようになって新しい行事として取上げたのが「短歌コンクールと短歌を語る会」であった。短歌大会のほかに企画したこの行事も今年は11回目を迎えることとなり、年中行事化したが、このあたりでまたマンネリを打破する新しい試みも必要ではないかと考えている。

昭和50年8月15日記

[redacted]

短歌同人誌
歌帖
34年1月号
定価　60円
編集兼発行人
葉　山　耕三郎
表紙（菖蒲）
福　田　平八郎

詩集
ひじりゆうげ
加　藤　真一郎　著
30年　頒価 300円
装幀　本人

総合誌
文芸大分
創刊号・33年
定価　70円
発行　大分県民文化会議
表紙　宮　崎　　豊

里謡集
野　路
堂　園　壺中庵　著
24年　定価 100円
表紙　藤　本　星　子

句集
車　椅　子
田　原　千　暉　著
31年　定価 100円
表紙　岩　尾　秀　樹

詩集
埋　立　地
首　藤　三　郎　著
27年　非売
150部限定
表紙　広　瀬　通　秀

県俳壇

今はなき森閑先生に

久保青山
県俳句連幹事・芹句会幹事

私が、俳句をはじめたのは昭和28年頃で、県のコッパ役人だったため、宇佐地方事務所から、大分県庁に転勤になってからである。

当時大分合同新聞の選者は、今はなき小池森閑先生であった。

昭和29年新春文芸入選句

松竹梅活けあり幅は長三洲

昭和30年新春佳句

飛梅はつぼみの多き初詣

昭和31年選評句

食膳に蕨も出でて耶馬宿り

（評）食膳に蕨が盛ってあったという取材で、耶馬渓谷中の朴とつな宿屋風景。

こんなことが、合同新聞に見られた。

この頃の県内俳句界のことは、何ら統一機関もなくよく知らなかったが、県庁の中にも俳句をたしなむ職員が多く、小池先生を招いて、時々講演会があった。

〝俳句も、歌舞伎役者と同じだ。役者が舞台に立つと、手の指先から足の動作までに、心血を注いでいるだろう。同じ位置にいても、身体と手・足の動作で、大へん長く走ったように見えるが、少しも進んではいない。俳句もこんな気持で……〟

……と強調されたことがある。

その後、県庁の俳句会も流派争いのためか何時の間にやら、中止してしまった。

また、当時の俳句は、なんといっても、ホトトギス系が多く、同人位に、大分市平田寒月、中津市遠入たつみ。別府市小池森閑、岡嶋田比良、渡辺一魯、林周平各先生。ほかに大分市篠原樹風、宮住青州、佐藤玲人、津久見溝口紫浪、別府石川時雨楼、菊池月日子、細川幻華洞、松田禹川、橋本対楠、和泉一翠園、日出二階堂楢雨、四日市元重簾直各先生の活躍がよく知られ、ほかに多くのお方がいたらしい。

現在、同人位で健吟の先生は、平田寒月、遠入たつみ、篠原樹風、元重簾直氏である。

当時も、写生を熱心にやれといわれていたが今もかわりはない。

最近の俳句は、芹系統がふえ、非常に進歩している。省略の上にも省略がきそわれている。

また当時、俳誌の発行が盛んであったが現在では、蕗発行が全国的になっている。

[redacted]

「飛蝗」から「石」を創刊

足立雅泉
現代俳句協会員・九州俳句作家協会員

戦争が終って雨後の筍のように俳句雑誌が続々と創刊または復刊してきたのには、私も驚いたけれど、またうれしいことのひとつであった。大分県も例外ではなく、**紫苑**、**大由布**、そして少し遅れて**飛蝗**が新鮮な感じで創刊し、県俳壇を大きく刺激した。私はこの三誌に創刊当時は何れも関係したのであるが、一番若い田原千暉の魅力は大きく、また私も飛蝗の同人であるということもあって、紫苑、大由布からは直ぐに離れてしまった。

紫苑は小池森閑、大由布は岡嶋田比良、飛蝗は菜殻火と改題して野見山朱鳥、というように、これ等三誌の選者は何れもホトトギスの同人であった。朱鳥は一番年が若く、また大分県人ではなかったが、高浜虚子主宰誌ホトトギスの雑詠巻頭を占め、あるいは常に雑詠上位にあって、その作品の特異性は全国を捲席し、虚子をして「茅舎を失い朱鳥を得た」と云わしめた新進気鋭の作家だったのである。

私はこの朱鳥からは多くのことを学んだ。可愛いがられもした。朱鳥は私の長男を素材として句を作り、短冊に書いてくれたりした。また私が発行していた俳誌「蝌蚪」（昭和25年――27年）に作品を送って呉れたりした。私が当時（昭和25年）二句しか投句できなかったホトトギス雑詠（虚子選）に入選したりしたのも、朱鳥の指導のお蔭であると思っている。

しかし昭和27年５月、私共（田原千暉を中心としたグループ）はこの朱鳥と袂を分つことになった。文学上の見解の相違が原因してのことである。朱鳥は菜殻火の発行所を福岡に移し、私共は石を創刊した。

田原千暉の本質は、もともとホトトギス風の俳句観、俳句手法には向いていなかったのである。虎の子は子猫に似ているが、何時までも子猫でいるわけにはいかないのと同じである。大分県の田原千暉はこうして日本の田原千暉となる機会を握った。これはことの成りゆき、発展の過程を見まもり続けた私が、20数年前を回想していま確実に認識し得る断言である。

私共は若かった。俳句処世の近道に目を塞ぎ、荊棘の道を自ら選んで突き進んだ。仲間は数多く落伍し、雑誌は痩せ細り、遂には月刊の誇りさえ失うことがあったけれども、進んで来た道に誤りはなかったと信じている。話に夜を徹し、銭湯に連れ立ち、口語俳句を語り、自由律俳句を語りあった仲間も、今は何れも40代、50代となってしまったが、大きく目は開けた気がするのである。

私共は今日まで、いわゆる俳句の大家と言われる人々に追従したことはなかった。むしろ中央に流行している現代俳句の弊風に対して、堂々と指弾する力を持っていることを誇りにしている。私共グループの発言は、明日の俳句発展のための、大きな力となっていることは確かなことである。

[redacted]

県柳壇

別府・大分・臼杵ラインで活動

金田眸花

元川柳誌「花火」主幹・俳誌「麓」同人・現代俳句協会員

終戦直後に復員して来た私は、再び川柳に対する志に燃えていた。しかし、戦後のあの混乱のさなかでは、衣食住に追われ、一般の風潮は文芸どころではなかった。それを無理して岐阜の清水汪夕と呼応し、川柳誌『花火』を創刊している。資力も用紙も乏しい中で前後の見境なく飛び出したのは、全く若さという以外ない。それでも荒廃した心を抱く青年が、ロマンを求めて次々と集ってきたのは、やはり時代相を物語っている。

これと時を同じくして、別府の内藤凡柳が、『川柳文化』を斉藤清幸の名編集により発刊、俄かに県内の柳界は活況を呈してきた。もともと別府には好作家が多く、これを機会に、成貞可染、荒金千秋等が続々と復活してきた。ついで大分番傘の織部天青、加藤圭路等も再出発し、機関誌『窓』を定期発行し、別府・大分・臼杵のラインが緊密となりそれぞれの持味を生かした活動を行った。

昭和20年代の県柳界はこの様に一時に花を咲かし、皆若くもあったので、ひどく情熱的に川柳に取組んでいた。各結社ともよく大会を開いたが、戦後の苦しい〝たけのこ生活〟の中で、川柳の愛好者がこんなに居るのかと驚くほどの人が集まった。

この間、〝川柳文化〟〝花火〟は共に順調な伸びを見せ、全国誌の中でも注目されていたのは、なつかしい思い出であるが、今は戦後の役割を一応果たして廃刊された。

雑誌はなくなったが、句会報により、その活動は少しも衰えることなく、凡柳がラジオ柳壇を、私が大分合同の川柳欄を担当したのもその頃で、新聞では僅か数名の投稿で始まり、やがて 100名を突破し、吉田夢笑、篠田初子等のよい作家を生んだが、今日の凡柳選はそれを倍増する盛況で、この新聞柳壇の果たす役目は大きい。凡柳氏の労を多とする。

川柳は作って楽しく、ジャンルとしての方向もあり、生涯この道に賭すこともよいが、その母胎である俳諧にさかのぼるとき、やはり俳句もやらねば、17音律の世界が本当には判らない。これは一部川柳作家の宿命でもあり、遂に昭和30年代は、川柳より俳句への〝なだれ現象〟が起り、磯貝碧蹄館（東京）、清水汪夕（岐阜）、金田眸花（臼杵）等が、川柳の筆を折り、俳句に投じた。しかも彼等は川柳人であった誇りと責任をもって、黙々と努力を重ね、誤解に耐え競争の烈しい俳壇で、既に一家を成して居ることは、せめてもの川柳に対する恩返しと言えよう。

幸い今日の県下柳壇の隆盛は、将来の展望を明るいものとしているが、〝番傘〟という川柳誌の大結社で団結しているため、同種同根の作家が多い。名作家凡柳以来、新しい旗手が出てないのは、すこし淋しい。大いに奮起を望む。

[redacted]

県里謡界

東の茨城、西の大分

土屋北彦

「里謡大分」選者・日本口承文芸協会員

思い出すのは、何といっても里謡界の先達堂園壺中庵先生の死去のことである。

昭和31年12月、県里謡界は、かけがえのない師表を失った。私は大分合同新聞に次のように書いた。

「里謡といえば壺中庵、壺中庵といえば里謡、それほど大分県里謡においての堂園壺中庵の存在は大きかった。過去、短詩型文学ジャンルの中で、短歌や俳句や川柳などに比べて、世の中に認識されない里謡という短詩を、その詩性において、その理論において、その普及において、ここまで盛り立てて来た壺中庵先生の功績は大きい。里謡研究50年の成果は、本県を中心に全国各地に数百名の作家を育て上げ、里謡界で『東の茨城、西の大分』として双璧になぞらえられるまでになったのである。その大分県里謡界の育ての親、堂園壺中庵先生の訃報に接し……」。

壺中庵先生の死去は、約20年の歳月をけみした現在、ますます重みをもってわれわれ里謡作家の頭上に覆さって来ている。その後の我々の努力にも関わらず、県里謡界は依然として低迷を続けているし、作品の面でも、理論の面でも、これといって特筆できる成果を挙げ得なかったし、普及の面では衰退の一途をたどるばかりで、新人は数える程しか育っていないのである。

我々は、師表を失った打撃から立ち直れなかったことは、残念ながらまぎれもない事実として受け止めなければならないし、それを乗り越えることが、今後の我々にとっての課題でもある。

もともと、里謡は作者名を持たない民衆の詩であった。自然発生ともいえる状態で生まれ、集団と場の条件を加えて育ち伝承されて来た歴史をもっている。明治になって、文壇一般の自我の追求といった風潮に乗って、黒岩涙香などの活躍で、個との関わりをもったいわゆる近代詩というものに脱皮していったのだが、作者名をもつことで、この詩型がどれだけ向上したかという点になると、疑問もある。

しかし、堂園壺中庵という一作家の仕事は、そのことをふまえた上でも、現代という流れとその歴史の厚みを充分に捉えた詩作品として鑑賞にたえうるものであった。

◎鳥を荒らして高見の枝に日和見ている寒鴉　壺中庵

私の部屋に、一枚の色紙がかかっているが、奇しくもこの壺中庵作品は、20年後の今日の世相を鋭く見抜き、痛烈に風刺している。時代とともに生き、しかも時代を超えて生きる作品、それこそ我々の求めて止まないものであり、範としなければならぬものである。

私は今そのことを厳しく受けとめている。あの時あの頃うけた薫陶が、未熟な私のうえに未だ花を咲かせていないことを恥ずかしく思いながら。

[redacted]

県詩壇

一文にもならぬ詩に

滝口武士
日本現代詩人会員・九州文学同人

終戦直後、郷里武蔵で俳句会を作りました。句会も時にはしますが、主に通信句会で、会員の投句や選句を謄写して配る方式です。之が案外続いて、昭和33年会員の従来の俳句を選んで句集「渓」を作りました。以後毎月通信俳句を発行し、毎年年刊句集を出版して、昨秋「句集渓第17集」を出しました。現在会員52名で、町内者の外に町出身で他郷に在る者、杵築市や安岐町からも参加者があります。

詩は戦前、戦中、戦後を通じて書き、処々に発表していました。昭和24・25年頃、大分の春日町小学校の教育講演会に行っていて、首藤三郎（以下敬称略）からマイクで呼出されて、酒卓を囲んだのが初対面だったでしょう。首藤の「心象」同人になったのはその後だったか、或いはその前だったか忘れました。今も「心象」で仙川竹生、郷司幸雄らと書いています。その頃雨辺都良夫、長谷目源太、挟間任らも書いていました。昭和36・37年頃安西冬衛が別府に来たので、首藤と亀ノ井旅館に会いに行った事もありました。

昭和33年秋、国東町で俳人で印刷業の南成人が、10数人の同人を集めて月刊詩誌「生活」を作り、その同人になりましたが、昭和40年分裂し、昭和41年２月から藤井国武、畑　菊巳、松本信正、市丸嗣郎、古庄克己、渡辺琢磨、山本静子、松本正信、摩尼光永、僕らで月刊詩誌「門」を国東町から発行し、只今 115号まで出ています。

昭和35年、県及び県教委及び西日本新聞社共催で、原爆忌を記念する県短文学人会が開かれ、長谷目源太と、おこがましくも僕とが詩の選者にされ、以後毎年開かれて、今年第16回を催しました。

昭和37・38年頃「九州文学」の同人大会が別府の九電保養所（六勝園近くの）で開かれ、僕も同人にされて、加藤真一郎と共に参加しました。これから「九州文学」の同人にもなって、年に２・３回は書いています。

さて昨年や今年、九州詩人祭に出席し、「九州文学」同人大会に出席しての感想は、大分県の文芸の層の薄さです。短歌俳句は知りません。詩、小説、評論の層の薄さはひどい。大分県民は小さく賢くできている。ロマンチシズムもリアリズムも乏しい。一文にもならぬ詩などにうつつを抜かすたわけ者の少ない事だ。大分・別府には色々のグループが居る。日田、中津、国東にも鉱脈はある。その他にも点々。しかし薄い。画家や音楽家には錚々たる人が居る。文芸は淋しい限りだ。

[redacted]

戦後の詩誌は「風見鶏」から

首藤三郎
九州文学同人・県詩人協事務局長

復員して間もないころ、大分市の焼け跡で、１人の男に会った。戦時中、地元の文学グループの世話をしていた人で、長池通りに、詩の好きな古本屋さんがいる、と教えてくれた。戦後、はじめて聞いた、詩の消息だった。そこで、先輩詩人の三島潤さんに会った。古本屋の主人と、幼なじみ、ということだった。これも、戦後、はじめて再会した詩人、ということになる。

三島さんは、戦時中、私が詩を見てもらっていた人だ。その三島さんを中心に、古本屋を根城にして、大分県の、戦後詩誌の第１号が生まれた。昭和21年２月15日創刊の「風見鶏」である。全国でいちばん早い詩誌の誕生が、小倉から出た「ＦＯＵ」で、20年10月の創刊だから、大分県の詩の出発も、決して遅い方ではない。

創刊号の同人は、阿部研吉、幸野島平、首藤次男、蔦三枝子、三島潤、それに私の６人。発行所は碩田詩人倶楽部となっている。いま考えるとウソのようだが、会費は月２円だった。

「風見鶏」は、私は３号で退会したが、その後、６号まで出して、雨辺都良夫さんらと合流、「詩郷」という詩誌に変身した。発行所も、大分県詩人倶楽部となった。手許には、23年７月30日発行の３号からしかないが、滝口武士、雨辺都良夫、加藤真一郎、島通夫、大山昌武、小松葉洲邦、三島潤、北村茶江、後藤真智子さんらが同人級で書いている。投稿欄のように、三段組みにされているところに、いま活躍している仙川竹生さんの名も見える。６号の、やはり３段組みのところに、長谷目源太さんも登場している。

加藤真一郎さんの、モダニズムの洗礼を受けた、しゃれた作品にお目にかかったのもこのころだった。

８号から、「詩郷」は「エトワール・ド・メール」と改題され、編集は雨辺さんから加藤さんへ移った。同時に、若手の詩人の登場も激しくなった。仙川、長谷目両氏の作品も、一段組みに出世？して、巻頭を飾ったりした。10号では、会員も57名になっている。

「エトワール・ド・メール」は、26年５月５日、12号を出して解散した。「風見鶏」から「エトワール・ド・メール」解散までの約５年の間に、新旧詩人の交代が行われた、ということになろう。

が、57名もいた詩人の中で、現在も持続して書いているのは、私を含めて、わずか５人のようだ。宙に消えたそれらの〝詩心〟は、うまく成仏しているのだろうか。

[redacted]

県文壇

みんな質素で仲間を愛した

志村泰治

「文芸風土」主宰

昭和20年８月。鹿児島県知覧（ちらん）の西部第17部隊の洞窟に、一人の暗号兵がじっとうずくまっていた。

敗報しきり。いつ米軍の九州上陸が始まるかも知れない。彼の胸に乱数表が巻かれ、掌には１ケの手榴弾があった。

死。

しかし、若し生きて再び郷土大分の土を踏み、筆をとることが出来たらとの淡い希望が脳裏をよぎる。

その日は意外に早く。

終戦。帰省。さあ書く。

当時復員して別府第２高等学校（今の緑丘高）に奉職した堀賢次氏の姿であった。

「葦は夢みき」「東京ハイデルベルヒ」他、いろんな作品が奔流のように書かれていった。

その頃の県内の「書き手」たちは、大なり小なり、同じような体験を経て今日にいたったと見てよいだろう。何らかの意味で戦争のみじめさをイヤというほど味わった者ばかりである。

まとまりらしいものも、あまりなく、個々に作品を書き綴っていた人たちが26年、初めて大分県作家協会をつくり別府市豊泉荘で発会式をあげた。50名ほどが集まり、私も高校の学生服で末席に居た。

みんなおどろくほど生き生きし、きれいな眼をしていたのをよくおぼえている。

司会役の小松葉洲邦氏（故人）は、その頃の社会党幹部水谷長三郎氏によく似た、ぶ厚い唇と桜色のつやつやした温顔で、入手しにくかったラッキイ・ストライクの赤い帯封のセロハンをピッと切られたのが不思議に今もはっきり残っている。

この会議の結果、県社会教育課のバックアップで「文芸風土」第一号が出た。編集に重要な役割を演じ、作品でも「黒い江（かわ）」「曇る海」などの力作を発表した三井雅義氏は、いつも縁の厚い眼鏡をかけ、ハトロン袋を小脇にかかえ、言いたいことをおかまいなくズバズバ言う人であったが36年の別大国道仏崎電車埋没の奇禍で亡くなられた。

県が手を引いたあとを受けついだ編集者の山本又平氏はフィリピンの山野の飢餓の逃避行。ビリビット捕虜収容所等を描出した長篇「道」を書いた。お酒が好きで、ほろ酔いのときが多かった。乏しい財布からいつもおごって呉れた。酒が廻ると、ホタル籠のこわれたのや廃品を拾って帰る人であった。人生とは？生き甲斐とは？……を感じさせる人でもあった。今、静岡県袋井市で筆をとっておられる。

長篇「地下水」「別府温泉」等を書いた宇都宮善克氏は、大分市上野の小さな家に東九州文学の同人を呼び、みんなに飲ますお酒の燗（かん）をすべく、いつまでも、旧式な呼び出し式の石油コンロの金具を押し続けていた。優しいが作品にはきびしい人であった。

時の流れは今、彼を別府市の助役の要職に迎えた。

思い出多い人を一人一人書けばきりがない。何人かの人だけ思いつくまま断片的にのべたのは意味がないでもない。当時の先輩達はみんな、とても質素で勤勉で、よく歩き、肌をあたためあうように文学仲間を互いに愛した。

今は何かが欠けているような気がする。孤立し飽きやすく適当に不勉強では。

[redacted])

思い出の人々・作品

高橋文夫

県立大分図書館、館内係長

今の県立図書館の裏手に、アメリカ文化図書館があり、昭和26年頃私はそこに勤めていた。県庁の若者たちがやってきて、創作の合評会をやった。秦静男、熊本昭三郎、大都留貞人、三浦均の４人。合評が終ると、４人はうちつれていそいそとカクウチに出かける。そこでの談論風発の模様を、秦静男が書いた。傑作だった。

筆力と風格が備わっていた。その後、秦は「文芸風土」や「東九州文学」に作品を発表し、県の広報協会か何かの懸賞に応募して当選したりした。

秦の文学の資質は、大衆文学にむいていたのではなかったか。彼は純文学を目差して、自分の資質を開花させずにいるのではないだろうか。

秦が描いた文学に憑かれた若者群像のなかで、抜群に奇矯な熊本は間もなく上京したが、２年ほど前、20年ぶりにひょっこり姿をあらわした。近頃はときどき大分合同の投書欄で、健筆の片鱗をみせている。

昭和28年頃、木造の旧県立図書館で、もっと若い人たちと勉強会をした。テキストは岩波新書の「文学入門」。中学３年の木本公世、大分大学の平山文雄、タイル屋のお嬢さんの３人だった。

木本は大学在学中から「映画評論」などに投稿。10年ほど前「詩集愛の猟人」を出し、その後講談社で仕事をしていると聞いた。

「文学入門」のあと、平山と19世紀ロシヤ文学を読みあった。私は彼の読書の進度についてゆけず苦しんだ。卒業して高校教師になったと、彼の級友から聞いたが、それきり消息がたえていた。２・３年前、組合の団体交渉で県庁の廊下に深夜座りこんでいたとき、肩を叩かれてふりかえると、ヤッケ姿の平山がいたずらっぽく笑っていた。20年の空白が一瞬に消えた。二言、三言かわしただけだった。それから何か月かして、彼は山で死んだ。単独登行だった。

昭和28年―30年に出た詩誌「銀河系」―「掲示」の同人で、今なお詩作をつづけているのは、岩本泰行と、図子英雄。大西俊章は昭和45年「詩集有珠海岸」を出したが、旧作が多いようなので、近頃の様子はわからない。

図子は大分大学卒業後、郷里の愛媛新聞社に入社。昭和32年「詩集海鳴り」を出し、48年第２詩集「呼び声」を出して成熟をしめした。ヘミングウェイを追悼した詩の結びの一節。

７月は季節の熔鉱炉／あなたの生まれ月／顔面をなかば吹っとばされても／ライフル銃へ腹ばいに肉薄する牡獅子の気魄で／あなたの炎は死にいどんでいる／いまも

[redacted])

大分県文芸年譜　＝昭和20年30年代の＝

20	㊍「新道」大悟法利雄、「にぎたま」藤原哲夫、「南風」清時荒二、「臼暘歌人」下郡峯生、「二豊歌人」明石勝己、「新樹」藤井武郎、㊍10月「合同柳壇」内藤凡柳、織部青天、㊍秋「自由文化」是永勉６号まで㊍「言論革命」小松幹
21	㊍９月「県歌人協」結成28年頃まで、㊍５月「紫苑」28年まで小池森閑、岡嶋田比良、６月「虹波」津田露色、11月「大由布」30年まで、12月「飛蝗」田原千暉編、古賀晟生選、㊍７月「花火」「大分吟社」金田眸花、「窓」大分番傘、「川柳文化」別府番傘、㊍５月「里謡耕人」堂園壺中庵、㊍２月「風見鶏」三島潤、㊍「二豊文学」「豊州文学」「大分評論」「暖流」「九州浪漫」「アカデミイ」「あこがれ」
22	㊍「現象」浅利良道、「朱竹」藤野武郎、「八雲」田吹繁子、㊍「ゆりかご」土屋北彦、㊍「風焔」河津文男、「青朝」渡辺健
23	㊍「歌帖」葉山耕三郎→(下郡峯生)、㊍５月「詩郷」県詩人倶楽部、作品「雨季」で加藤真一郎九州文学賞受賞、７月「心象」首藤三郎、㊍「青窓」
24	㊍４月「菜殻火」野見山朱鳥、田原　暉、58号27年分裂、㊍12月「エトワール・ド・メール」加藤真一郎26年５月12号まで、㊍「白雲」「望潮」「月見草」「文芸牧場」「山郷」「青磁」「いづみ」「若草」
25	㊍エトワール・ド・メールは詩と絵画展を開く
26	㊍日田市出身石川利光「春の草」で芥川賞、㊍「文芸風土」４号まで「風土」がつづいて５．６．８．９号４冊を出す、「断層」油布洋一、「GUERNICA」諫山昌信
27	㊍５月「石」田原千暉、「生活」南成人、「干潟」足立稚泉をふくめて独立、㊍高文連「高校文芸」、大分大学学芸学部「堆堝」、別府大学「ルボア」「郷土豊前」
28	㊍「別大俳句」、㊍長谷目源太県文学賞受賞、「銀河系」高橋文夫、㊍三井雅義県文学賞受賞、㊍「川柳おおいた」木本夜潮
29	㊍「ばんちゃ」、㊍「掲示」
30	㊍「文芸」、㊍「詩壇現場」、　「エリイト」「大分春秋」「二豊随筆」、㊍江藤孝之助県文学賞受賞
31	㊍「竹田短歌」伊藤晴子編→(工藤忠士)、㊍「東九州文学」22号まで、33年廃刊、「日田文化」
32	㊍５月「生活」藤井国武
33	㊍「日本里謡」土屋北彦、㊍11月「文芸大分」県民文化会議、㊍「短歌月刊」村上冨六
36	㊍県歌人クラブ結成会長葉山耕三郎、事務局長鶴見英之
37	㊍３月「箭山」荒川紫洋編、㊍10月「対話」長谷目源太㊍「月刊ベップ」、㊍「牙」石田比呂志
39	㊍「臼杵文学」「ふるさと」、㊍「湾」幸米二、㊍「仙人掌」

最近の郷土本

- 大分の空襲
- ふるさとの女たち
- 大分近代女性史序説
- 大分の自然を守る
- ふるさとのうた
- 地名覚書
- 大分県写真帖（複刻）
- 下竹田今昔
- 大分の地蔵たち
- 大分県小藩物語（上）

22年	歌集「青空」渡辺健、「九州版画」橋本富夫
23年	「遺された高田文化」堂園壺中庵、「山国初夏」水谷護
24年	「野路」堂園壺中庵、「富貴寺」酒井富蔵、「サーヴィス読本」後藤武夫、「大蔵永常につき所感を語る」羅木儀一郎、「松平忠直」久多羅儀一郎
25年	歌集「緑門」堀正三、「丸山待子歌集」浅利良道、「観光事業論」田中喜一、「一万田氏由緒考」久多羅木
26年	「大分県新誌」篠原九万太、作品集「椎の実」雨辺都良夫、「日本古代漁業経済史」羽原又吉、「豊前国佐「皓い唄」香野響三、「噫桑野訓導」藤野新
27年	「人生70年」矢野孝吉、「山の郵便局の歩み」高橋善七、「埋立地」首藤三郎、「日本漁業経済史」4冊、園久子、「三浦数平先生小伝」御手洗辰雄、「大野郡知名人物開史」仙田昇
28年	「死線をこえて」津田露色、「玄黄」宮崎武夫、「玄語稿本之研究」田口正治、「豊後高田名物ホーランエ也
29年	歌集「死への歩み」堀正三、「合歓樹」浅利良道、「春月」渡辺一郎、「朝来村郷土史」酒井富蔵、「大友繁次、「大分県方言の旅」松田正義、「小さき海」雨辺都良夫、「中津藩史料目録」今永正樹、「志士後藤
30年	「聖憂華」加藤真一郎、「国境の雁」堀正三、「栂牟礼」長門はる子、「杵築史考」前田光利、「霞町雑記
31年	「番匠」長門はる子、「別府詩史」秋月桂堂、「豊後風土記の研究」佐藤四信、「別府伝説と情話」　堀藤吉北村清士、「車椅子」田原千暉、「入道雲のうた」仙川竹生、「相撲求道録」時津風定次、「南豊先哲偉人
32年	歌集「郷音」中野貞彦、「青榛原」阿部太、「山峡の町」藤原哲夫、「国東半島」加藤数功、「よいやな」康夫、富来隆、「宇佐八幡宮の研究」中野幡能、「北豊中心郷土史年表」大隈米陽、「南次郎」御手洗辰雄
33年	「幾内庄園の基礎構造」渡辺澄夫、「由布山」加藤数功、「三つ拍子祭文踊」志村弘、「くちなしの花」米「泥と陽の記録」諫山昌信、「武藤完一画集」武藤完一、「由布山麓のキリシタン」半田康夫、「金屏風」
34年	「桜」田吹繁子、「映画」堀正三、「石蒐」伊藤裕輔、「身辺雑記」土井寛申、「里謡その歴史と創造」土「大分県金石年表三、別府之部上」安部巌
35年	「国木田独歩源叔父アルバム」松本義一、「紫藤井発句集」松本義一、「爪紅」重光みどり、「この国と共郷土大分県」兼子俊一、「武内火男火売神社史」半田康夫、「興亜 400年之大友氏」田北学、「方言生活の
36年	「小庭」阿部太、「ふるさとの駅」加藤長、「大分県の民謡」第1集半田康夫、加藤正人、「荒城の月影に」伝」北村清士、「岡藩藩祖中川秀成公略伝」北村清士
37年	句集「年輪」篠原虎太、「磯鳥」鶴見英之、歌集「荒城」大友芳雄、「大分県の地理」兼子俊一他、「地名
38年	句集「合図」田原千暉、「園林」葉山耕三郎、「人島」長内はる子、「武蔵町史」半田康夫、「別府小学校理」安部光五郎、「埋れた果実かぼす」吉田喜一郎
39年	「ひるがお」山田こころ、「径」柴田小夜子、「大分県の民謡」土屋北彦、「昔の大分町」佐藤定雄、「昔津町の奇人吉四六話」奈々木山人

30年　日田林業史料　林業発達史調査会
〃　大蔵永常先生　中島市三郎
〃　画聖竹田先生百廿年祭誌　同協賛会
〃　豊後に於けるキリシタン墓　マリオ・マレガ
31年　大分市史二冊　大分市役所
〃　国立公園姫島の漁業　姫島郷土史編纂委員会
〃　島の植物（国立公園姫島）　姫島郷土史編纂委員会
〃　国立公園姫島資料編　姫島郷土史編纂委員会
32年　人間五岳　中野市三郎
33年　中村西国伝　大内初夫
福沢諭吉とその思想　野村廉太郎
34年　福田平八郎　藤本韶三
〃　後藤文夫先生の横顔　同後援会
35年　耶馬渓文化叢書　山崎利秋
〃　豊後梅　大分県
〃　くにさき　和歌森太郎
〃　臨済録　足利紫山後援会
36年　豊後南海部郡の磨崖石塔群　弥生村教委
〃　豊後茶ばなし　梅林新一
37年　山上猛虎　長谷川隆一
〃　木下哲　同編集委員会
〃　七双子古墳群　佐伯郷土史料研究会
〃　中津市古要神社の「くぐつ」　大分県教委
〃　ロシヤにおける広瀬武夫　島田謹二
38年　ふくざわゆきち　那須田稔
〃　大分県警察史　県警本部
39年　豊後の長者　今村元市

大分県人の著書一覧

昭和20年30年代の

この一覧表は、昭和39年11月６．７．８日の３日間大分市トキハギャラリーで催された「郷土本と稀書・珍書・趣味本展示会」（主催大分本好きの会、大分県立大分図書館）の目録にある、大分県人の著書の中から昭和20年30年代のものを抜粋し、加えて「大分文化百年史」文芸の戦後の部、その他諸々の資料を参考にして編集係がまとめたもの。

平岡一策、「武藤完一版画集」第１集武藤完一、「帆足万里略伝」久多	24年
儀一郎、「寒庭」挾間任	25年
田郷土史・上巻」大隈米陽、「妻よ花々」三島潤、「地下茎」小松定徳、	26年
羽原又吉、「塚原郷土史」早見多畴、「前進」挾間任、「春の冠」加藤真一郎、「滝廉太郎とその作品」中	27年
ンヤ」堂園壺中庵、「別府歴史大年表」安部巌、「観光経済調査」田中善一、「佐伯郷土史、前後」増村隆	28年
家年中行事」安部巌、「春風秋雨世路日記」藤井文雄、「木浦鉱山小史」安部巌、「日田県竹槍騒動」武石順平小伝」立川輝信、「宇佐山郷先達伝」大隈米陽	29年
」一万田尚登、「岡城物語」北村清士、「早水台」八幡一郎、賀川光夫、「羚羊人の灯」佐藤文夫	30年
郎、「西武蔵村史」渕上金吾、「大分県方言の旅」第２巻松田正義、糸井寛一、「竹田市の名所旧蹟を尋ねて」略伝」北村清士	31年
佐藤満洋、「車輪は明るく」佐藤済、「教育史の上から見た女紅場」久多羅木儀一郎、「大分県の歴史」半田、「重光向陽小伝」豊田国男、「鶴崎市史人物篇」久多羅木儀一郎	32年
田貞一、「農民一揆附岡藩財政経済史料」北村清士、「柞原八幡宮注連柱建碑の由来と意義」植木義雄、飯田忠	33年
屋北彦、「旅芸人始末書」宮岡謙二、「邪馬台女王国」富来隆、「江戸時代における別府の交通」安部巌、	34年
に」石田修、「釈尼妙善伝」後藤武夫、「別府湾の海上交通」安部巌、「郷土秘話」渡辺綱雄、「私たちの実態」松田正義、「佐藤恒彦」小俣英明、「啄木」武藤完一	35年
安部とみ、「豊後キリシタン遺蹟」半田康人、「別府における史的人物の面影」堀藤吉郎、「中川入山公	36年
覚書」染矢多喜男、「豊後国大野荘史料」渡辺澄夫	37年
遠足資料集」安部巌、「ホテル観光業の経営」田中喜一、「豊後国村明細帖」渡辺澄夫、「鶴崎の歴史と地	38年
の竹町通」佐藤定雄、「ある市長のノート」脇鉄一、「国東半島におけるさいの神」酒井富蔵、「限豊後野	39年

その他関係図書

＝その一部＝

21年　白雉　大分県職
〃　南天屋敷大分駅前事件の事　野溝生子
22年　白石諭吉　羽仁五郎
〃　福沢諭吉　高橋誠一郎
23年　双葉山定次　鹿熊猛
24年　大分県人事名鑑　同盟通信
〃　福沢諭吉　宮下正美
〃　ドンフランシスコ　佐藤太有
〃　福田平八郎　横川毅一郎
25年　福沢研究　福沢先生研究会
〃　広瀬淡窓　吉川克己
〃　福沢諭吉と新教育　小林澄兄
26年　山本達雄　小野順造
27年　速見郡町村誌　万里先生百年祭記念刊行
〃　日田十年史　日田市役所
28年　宇目の唄げんか二冊　奥宇目民俗保存会
〃　義民穴井六郎右衛門　日田文化協会
29年　足利紫山臨済録提唱　碩田評論　碩田評論社
〃　地学上より見た姫島　姫島郷土誌編纂委員会
〃　郷土歌集姫島　姫島郷土誌編纂委員会
〃　姫島近海魚介類方言集　姫島漁協
30年　福翁百話　時事新報社
〃　滝廉太郎伝　宮瀬睦夫
〃　教聖　広瀬淡窓　吉川克己
〃　一万田尚登小伝　阿部康二

ある少年の出発点

長谷目　源　太
九州文学同人

昭和二十年三月、動員先の陸軍造兵廠（しよう）の講堂で、旧制中学の繰上げ卒業式。その日も、米空母を発進したグラマン戦闘機の来襲を恐れながらの開式であった。四月、何とか軍の学校へ進まずに、ある専門学校へすべり込んだものの、八月、敗戦。とりあえず帰郷。父や祖父たちを見習って農作業の明け暮れ。父は根っからの百姓、村役場に勤めていた祖父は、漢詩などへ興味があり、やたらに書をものしていた。日本の敗戦など、どこ吹く風と言った、さも超然としたところが、孫である少年には、たまらない魅力であった。そして、多感な一人の少年は、詩とも小説とも、韻文とも散文ともつかぬ、文法などまるで無視した、わけの分らぬものを、毎日、毎日、書きためていたのであった。

敗戦の年の秋、徳田球一らが出獄し、リンゴの歌が小学生たちによって愛唱され始める頃、復員青年や、村の小学校教師、疎開していたインテリたちによって、雑誌の発刊が企てられた。目的は、農村の民主化、平和日本の建設。少年も参加を決意、ワラ半紙に書き綴っていた〝小説〟一篇を持ち込んだ。牛乳配達をしながら東京の美術学校へ通っていたTという先輩が、少年の作品を高く評価して、掲載が決まった。雑誌の名は『言論革命』。創刊は、二十年の十二月であった。のち、この雑誌の編集同人からは、革新代議士も生まれ出る。

また、その頃宮崎県（東諸県郡？）から、『建人文学』の同人募集が、朝日新聞かに載っていた。平和国家は、文化の振興が第一というわけ。早速、何がしかのお金（確か十円）を同封して加入申し込み。『建人文学』の内容は、わが同人誌『言論革命』のほうが充実していたように思う。

そして、翌年、小倉から『建設詩人』が出されていることを『建人文学』の誌上で知り、徳永寿氏に直接、手紙を出して加入を申し込む。徳永氏から、作品を送って来いと厳然たる返事。自信はなかったが、散文小説風の、比較的短いものを十篇ほど送ってみたら加入が認められ、同人となる。

『言論革命』（杵築市八坂）、『建人文学』（宮崎）、『建設詩人』（北九州）と、誌名が示すように、戦後の社会、政治情勢を表徴して、文学雑誌も、平和日本の再出発、民主主義的な文化活動の一つとして、まさに優位的な存在として認められていたのである。少年自身も、政治的な自覚というより、当時の社会にあって、文学は、有用かつ、不可欠のものなのだという確信をもって、それに取り組んでいたのであった。

それから三十年。顧みて、未熟な少年後期から、青年前期を、数多くの若者を犠牲にして祖国の命運を決めた悲劇的かつ、再生への意欲に燃えた昭和二十年八月十五日を境にしての衝撃的な体験、そこを文学的出発点とした私。この三十年間が個人的に充実したものであったかどうか、全く自信はないのだが、敗戦直後のあの時期を、『言論革命』＝『建人文学』＝『建設詩人』へと、自分よりはるかに年長の、青、壮年の政治を志す人、文学・芸術を志す人たちと行動を共にできたことは、その後の私、少年自身の人生と、文学創造上の主題、内容に、強烈な影響を与えて行ったように思えるのだ。

少年の年齢。昭和二十年、数え年十七、昭和二十一年、同十八歳。太平洋戦争ぱっ発の年、十三歳。

[redacted]

ニュース

大分県芸術会館着工へ

芸術会館は各種美術展や文化財の公開をする展示室や舞台芸術部門の活動と発表の場となるホール、それに文化団体の研究や会合に当てられる会議室、管理棟など、地上３階、地下１階で、敷地は約１万平方メートル。総床面積５千平方メートル。総工費13億８千万円で53年度完成をめざす。今回は初年度分として、４億３千７百万円を計上している。（８．17合同新聞）

• 福田平八郎里帰り展

５月、ソ連から文化庁に返還された故首藤定氏コレクションの福田平八郎氏（昨年３月死去）遺作42点はさきほど東京国立近代美術館で公開されたが、出身地である大分市でも来年５月、大分市内で、「故首藤定氏コレクション福田平八郎画伯遺作展」として公開展示されることになった。

• 国東文化総合調査始まる

大分県は本年から３年計画で国東半島の六郷満山文化の概要について、総合調査をおこなうことになり、初年度は豊後高田市、西国東郡で８月24日から６日間、史跡、古文書、石造美術、民俗、古建築史、仏教史などの各分野を調査した。２年目は東国東郡、３年目は杵築市、速見郡を調査の予定。

• 佐伯文化財保存会（仮称）が発足

さきごろ旧佐伯城３の丸やぐら門の改修をした同保存会が発展的解消し、このほど新しい組織として佐伯、南郡の文化財保存の活動をすることになったもの。

会長、高木嘉吉（佐伯史談会長）

文化財保護法改正（50年10月１日施行）５つの改正の要点

① 遺跡や古墳などの埋蔵文化財保護のための権限強化
② 由緒ある町並みや集落の保存
③ 失われていく郷土芸能の保護
④ 絵画や仏像、建物などの文化財修理保存技術者の育成
⑤ 地方自治体の文化財保護体制の整備

外科・呼吸器科・気管食道科・麻酔科
安永病院
院長　安　永　敏　教
大分市大道４丁目（大分バス志手入口下車西入る）
☎44－0359（代表）